

○山本未陶^{やまもとみと}、筒井昭仁、松岡奈保子、今里憲弘、三浦喜久雄

福岡歯科大学、NPO法人ウェルビーイング

【目的】

健康教育では知識の獲得だけではなく行動の変容や獲得が目標となる。高橋らは健康教育において重要な意味を持つと考えられる自己を管理する認知的スキルを自己管理スキル(SMS)と名付け、SMS尺度を開発し¹⁾、これまでに中学生、高校生、大学生、成人に適用した場合について検証が行われている²⁾。

小学生は生活習慣を獲得する重要な時期にあり、この時期に自己管理能力を高めるための教育を行うことは特に有効であると思われる。本研究では教育効果を評価するものとして自己管理に関する認知的スキルを測定できるSMS尺度の小学生への適用に関して検討を行った。

【方法】

対象は福岡市立A小学校の5年生82名および大川市立B小学校の5年生28名である。事前に教諭にSMS尺度の内容が理解できるかどうか確認した。尺度内の項目は改編せず、ルビを振ったものを使用した。データ収集の都合上、A小学校では6月に、B小学校では2月に実施した。

A小学校ならびにB小学校のSMS尺度得点および項目ごとの平均点を比較した。その他の解析にはA小学校のデータを用いた。尺度が小学生においても一つの概念を説明できているかどうかの確認を主成分分析に

て、また、小学生に適用した場合の因子数とその内容を因子分析にて検討した。

【結果】

①SMS尺度の得点

SMS得点はA小学校5年生(以下、A小学校と略す)が 29.5 ± 5.6 (平均 \pm 標準偏差)、最小値13、最大値40であり、B小学校5年生(以下、B小学校と略す)が 26.6 ± 5.7 、最小値16、最大値39であった。両校間には $p=0.01$ で有意の差がみとめられた。項目2、8は他の項目に比べて低い点が両小学校に共通していた(表1)。

③SMS尺度の内部構造とその得点

主成分分析にてA小学校の第一主成分因子負荷量を検討したところ、全ての項目で0.5以上を示し、第一主成分の寄与率は36.4%であった。また、因子分析を行い因子負荷量が0.35以上のものをまとめたところ、3つの因子が抽出された(表2)。第I因子は項目1, 4, 7, 10を含むことから、『問題解決的に取り組むスキル』のうち「計画的に取り組むスキル」とする。第II因子は項目3, 5, 6, 9を含むことから『問題解決的に取り組むスキル』のうち「失敗への対応」とする。第III因子は項目2のみであることから「否定的思考をコントロールするスキル」とする。項目8は、いずれの因子に対しても負荷量が低く3因子には含まれなかった。

表1 両小学校の項目ごとの平均値 : 両校に共通して平均値が低かった項目

項目	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	合計
A小学校	2.8	2.4	3.3	3.0	3.1	3.0	3.0	2.5	3.1	3.2	29.5
B小学校	3.1	2.2	2.8	3.2	2.6	2.2	3.3	2.2	2.3	3.0	26.6

表2 因子分析結果 (主因子法、プロマックス回転) *: 逆項目、 : 因子負荷量が0.35以上

項目	因子 (小学5年生)		
	I	II	III
1. 何かをしようとするときには、十分に情報を収集する。	.88	-.11	-.00
2. 難しいことをするとき、できないかもしれないと考えてしまう*。	-.01	-.00	.97
3. 失敗をした場合、どこが悪かったかを反省しない*。	.33	.42	-.12
4. 何かを実行するときには、自分なりの計画を立てる。	.46	.22	-.14
5. 失敗すると次回もダメだろうと考える*。	.25	.38	.24
6. 作業しやすい環境を作ることが苦手だ*。	-.19	.89	-.00
7. 困ったときには、まず何が問題かを明確にする。	.57	-.00	-.00
8. しなくてはならないことよりも楽しいことを先にしてしまう*。	.31	.24	.00
9. 何をしたらよいか考えないまま行動を開始してしまう*。	.01	.37	.16
10. 自分ならできるはずだと心の中で自分を励ます。	.57	-.01	.20

【考察】

主成分分析の結果から、SMS尺度を小学生に用いた場合にも一つの概念を測定できていることが示唆された。しかし、構成因子は中学生以上と異なっていた。中学生以上では3因子『問題解決的に取り組むスキル』『否定的思考をコントロールするスキル』『即座の満足を先延ばしするスキル』を抽出している²⁾。『問題解決的に取り組むスキル』は「計画的に取り組むスキル」と「失敗への対応」の二つに分かれたり、『即座の満足を先延ばしするスキル』因子に該当する項目8が小学生では3因子に含まれなかったなど、因子の内容には違いが認められた。SMS尺度および項目ごとの平均値はA小学校とB小学校

で近似するところが多く、妥当性に関しても問題ないと思われた。

【結論】

小学生へのSMS尺度適用は可能であるが、『否定的思考をコントロールするスキル』『即座の満足を先延ばしするスキル』の評価には留意する必要があると考えられる。

【参考文献】

1) 高橋浩之ほか: 自己管理スキル尺度の開発と信頼性・妥当性の検討. 日本公衛誌, 47 (11), 2000. 2) 高橋浩之ほか: 年齢段階による自己管理スキルの差に関する検討. 日健教誌, 12 (2), 2004.

【連絡先】 山本未陶

〒814-0193 福岡市早良区田村 2-15-1
 福岡歯科大学口腔保健学講座
 TEL: 092-801-0411, FAX: 092-801-0616
 E-mail: fujiyosi@college.fdcnet.ac.jp